

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	竹野内 恵太
論文題目	エジプト初期国家成立期における石製容器生産の実態と支配戦略
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、初期国家成立期である古代エジプト初期王朝(第1・2王朝)時代の石製容器生産の実態を詳細に検討し、石製容器が支配階層にとってどのような意味や役割を持っていたのかを論じている。第1王朝期の墓地においては、墓の被葬者の社会階層が高いほど、大型化した特殊器種や遠隔地産の稀少な石材で製作された石製容器の存在が知られており、副葬された石製容器が威信材として使用されていた実態が明らかになっている。ところが、第2王朝期になると、墓に副葬された石製容器の量が爆発的に増加するようになる。この第1王朝から第2王朝期における副葬された石製容器の量や器形における大きな変化が、何に起因したものであるのかを詳細に検討することで、「なぜ、石製容器が、初期国家社会の形成・成立と歩調を合わせるように大量生産されたのか」について論じたものである。</p> <p>序章「本論の目的と分析方法」では、導入として古代エジプトの石製容器に関するこれまでの研究史をまとめた上で、本論文の目的・視点を述べている。</p> <p>第1章「地理的・歴史的環境」では、石製容器の分析・考察の前提となるナイル川下流域の自然・石材環境をまとめるとともに、エジプト文明の初期社会の概要に関して記述している。</p> <p>第2章「石製容器生産と流通組織」では、石製容器の生産・流通メカニズムの全体像とその変化について考察している。生産体制を解明するため、石製容器の法量分析や製作技法・工程の復元研究を実施し、分析の結果、原王朝時代には、石材ごとのサイズ・プロポーションが未分化であったものが、第1王朝になって石材の性質・硬度に応じた製作システムが成立したと論じている。また、地域分布を確認するとメンフィス・ティス地域の首都圏域の遺跡ほど大型サイズで遠隔地産石材を保有しており、当該期から政治的集権化および行政システムの確立にともなって、製品流通における序列的な供給システムが遺跡の社会的階層性に基づいて形成されていたとしている。さらに、第2王朝の大量生産化の進展において、製作システムや流通システムが、地方需要の増大によって変化したことを明らかにしている。</p> <p>第3章「石製容器副葬の階層構造と供物儀礼における利用形態」では、石製容器の社会的機能や価値体系といった需要面を論じるために、その副葬構造と儀礼的機能を分析している。具体的には、墓構造から設定した被葬者の階層性と石製容器組成を比較し、その相関関係を検討している。その結果、石製容器の副葬には階層的な規範が存在していたこと、石製容器が、副葬時の共通儀礼を普及させ、集団間・地域間を儀礼的に結び結び、さらにエジプト全土の社会で為政者を頂点とする支配体制を支えるための戦略的・象徴的な資源として利用されていたと指摘している。そして、この共通儀礼の具体像を復元するために、当時の供物や副葬品の規範を描いた葬送用ステラを詳細に分析し、石製容器組成と比較検討した結果、円筒形壺と無把手壺・双耳壺がオイル・軟膏の容器として、それぞれ相対的な価値が設定されていたとしている。また、第2王朝後半から第3王朝初期の地方墓地の最上位層の墓から出土する石製容器組成は、ステラの儀礼リスト上で描かれた容器セットと極めて類似したものであると論じている。儀礼リストは、形式的な食事に入る前の食前儀礼を表現していることから、石製容器のセットが、供物儀礼の行為そのものを再現したものであったと結論づけた。葬送用ステラがメンフィス地域からのみ出土するため、石製容器の配布で首都圏域で創出された供物儀礼を地方社会に普及させようとする為政者側の戦略が垣間見えると指摘した。</p> <p>第4章「石製容器大量生産化の背景」では、副葬土器及び墓構造から領域形成と地方組織化のプロセスを再検討した結果、原王朝時代では、上・中エジプト地域で先王朝時代の伝統的器形群を保持しつつ、デルタ地帯を含む下エジプト地域では、諸遺跡が分散傾向にあった。しかし第1王朝になると、この地勢的・伝統的な地域性の論理は解体され、「メンフィス・ティス領域」が形成される。このクラスタの形成要因はワイン壺</p>	

と「儀礼用土器群」の有無あるいは多寡であった。続く第 2 王朝では、当該領域が地方を取り込む形でさらに地域間の副葬土器組成が集約していく。この変容の背景には、御料地の設立と再分配システムの形成が、地域的ネットワークの構造化を促し、物資や人員、情報を伝達する経路が明確に規定されるようになったことにある。原王朝の段階では、未だ政治的・経済的コントロールが上下エジプトを通貫する形で成立していなかったため、副葬土器の選択性も南北で異なる様相を呈していたのだろう。また、土器副葬において新たな儀礼上の選択性が導入され、行政ネットワークを介してその情報・概念が共有されていたと考えられる。副葬土器の地域性の動態は、地方組織化を推進する統一王朝による越境的システムの構築と政治的な核地域の形成といった領域形成の初動を如実に表す。また、第 2 王朝の儀礼用土器および階段付属墓の普及は、中央の葬制が地方社会にも拡散していく様相を物語っている。石製容器の配布も同様の文脈で理解することができ、為政者が「統合儀礼」を行って地方社会を取り込んでいく結果であったと考えられる。

第5章「エジプト初期国家形成過程における支配戦略の変動では」では、主に二元プロセス理論から初期王朝社会の支配戦略を理解し、石製容器がその際にどのような媒体であったかを検討している。そして先王朝時代から支配戦略の変遷を見ていくと、Ⅰ～ⅡA-B 期では、協同型戦略の下で集団統治がはかられたが、ⅡC-D 期からは地域・政体間の統合関係の下で発達した交易ネットワークによる外的指向のネットワーク型戦略へと変貌していき、ⅢA-B 期では交易圏の拡大にともないネットワーク型戦略もより広範になる。そして初期国家の成立期であるⅢC-D 期には、多様な権力資源を祝祭・葬祭イベントに集約・統合することで協同型戦略に埋め込まれた形でネットワーク型戦略を展開していくが、この主要な媒体が石製容器であったとしている。

終章では、本論文の結論を述べるとともに、続く古王国時代への連続性を論じることで締めくくりとしている。

以上のように、本論文は、先王朝時代末期から初期王朝時代にかけて墓に副葬された石製容器を対象とし、その生産・流通・消費（副葬）の各段階を再構築したものである。当時の社会背景と対応させながら、石製容器が当時どのような媒体であったのかを明らかにしようとするもので、文明の形成・成立期である初期王朝社会の特質を浮き彫りにすることに成功している。当該時期に、石製容器が副葬品として大量に生産される現象を明確に説明した研究は皆無であり、従来の研究では、こうした現象を「王・中央行政に従属する専業集団の出現」、あるいは「上位層の経済的機会の増加」などの解釈を提示するにとどまり、国家形成を物質文化から語るための説明要素として引き合いに出されるのみであった。本論文は、これまでの研究にはない詳細で総合的なものであり、大いに評価できるものである。ただし、第5章における二元プロセス理論を使用した支配戦略モデルの構築などの部分においては、今後のより詳細な検討が期待されるが、そうした検討箇所が存在するとしても、本論考は、エジプト初期王朝時代の石製容器研究にとって、画期的な研究であり、新たな地平を拓くものであると言える。以上のことから、博士学位の授与にふさわしい論文であると判断した。

公開審査会開催日	2019 年 1 月 21 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	近藤 二郎	エジプト学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	長崎 潤一	先史考古学	
審査委員	早稲田大学高等研究所・准教授	馬場 匡浩	エジプト考古学	博士(早稲田大学)
審査委員	近畿大学文芸学部・教授	高宮 いづみ	エジプト考古学	